



国内最大の
オタクイベントで出会った男と、
イベント終了後、その日の内に、

普通にパコパコしたオタクの女の子達

この作品はフィクションです。
実在する人物・団体・事件等とは一切関係ありません。
また、登場人物は全員十八歳以上です。

「いや〜やってきましたなあ〜」

数時間の行列状態から抜け出し、

ついに会場内に入った俺は、歓喜の声をあげた。

年に二度開催される、国内最大のオタクイベント。

アニメ・マンガ・ゲームの祭典、

『オタクコミュニケーション』。通称『オタコミ』。

俺はこの聖地に、ついにたどり着いたのである。

俺はオタクだ。

アニメやマンガやゲームが大好きだ。

オタクというと、

地味で根暗な社会性のない連中、

みたいに言われていた時代もあったけど、

俺をはじめとする今のオタクは違うぜ？はは♪

今、オタク界ではコミュニケーションが重視され、

一人閉じこもって趣味に没頭する人種から、

同じ趣味で仲間と盛り上げられる人種へと、

俺達は変貌を遂げたのだ！

もうオタクが白い目で見られ、

犯罪者予備軍のように言われることもない。

オタクとは、新時代のスタンダードなのである！

わははははははは！



「ちょっと〜テンション上げすぎじゃない、平野?」

「へ〜そうか? わはは! でもいいだろ?

テンション上げるならいつなの? 今でしょ!

千夏だって上がってるだろ〜?」

「うーん。まあそうだね〜くすっ」

「わはははは!」



皆さん、紹介しよう。

彼女は岡中千夏。大学のオタクサークルの友人だ。

そう。わたくし、実は今日、

女の子と二人でオタクコミに参加してるのであります。

わはは! でも心配しないで、彼女じゃないから!

実は二日目の明日、

初めてサークル参加して同人誌を売るのだけれど、

その売り子を彼女にお願いしたってわけ。

その流れで、

今日は二人で一般参加しようってなったただけなのだ。

最近のオタクは、普通に恋愛したりして、彼女いるリア充の奴も大勢いるけど、

やっぱ俺は思うのだ。オタクは非モテであるべきだと。非モテ・非リア充だからこそ、非モテ的発想から、生まれてくる作品や文化だってあるんだし。

だから大丈夫だよ、オタクのみんな。

俺は非モテの非リア。付き合ったことないし、童貞。

千夏は決して彼女なんかじゃないから。

…とか言いつつ、

千夏って名前で呼んでる俺のリア充感。わはは！

千夏はうちのサークルの数少ない女性メンバーで、

性格はちょっときついけど、

同学年の間ではマドンナ的存在。

そんな彼女に売り子を頼み、

軽く承諾させる俺の恐るべきコミュ力！ははは！

千夏と参加するって言った時の、

松田や飯島（昔ながらのキモオタクくん・コミュ力皆無）の顔が忘れられません。



「平野くなに一人でニヤニヤしてんの？」

「あら？すまぬすまぬ！ちょっと考え事をね」

「考え事？」

「うん。やっぱコミュカって大事だなあ〜って」

それに尽きる。コミュカがあるから、

こうして女の子とオタコミに来れるんだし。

コミュカさえあれば、

オタクでも女の子と仲良く出来るのだ。

松田や飯島も、コミュカを鍛えるべきだね！びしっ！

「もう…わけわかんない」と言っていないで行くよ？」

「はあ〜い！うふふ〜」

千夏に叱られ、微妙に幸せ…。

オタクは非モテであるべき、そうわかってはいるけど、
多分…千夏って俺のこと好きなんだよね！あは！

簡単に売り子オツケーしてくれたい。

こいつも彼氏出来たことないっばいし、きつと処女♥
やべー！付き合うことになったらどうしよう〜！

松田〜飯島〜すまん〜！わははは！

「咲ちやーん！」

会場内のコスプレ広場にやってきた俺と千夏。

目的はある人物に挨拶するため。

それが彼女、清純派コスプレレイヤーの咲ちやんだ。

彼女はネットでも知り合った俺の友達。

ネットでも炸裂する俺のコミュカ。

マジすごくね？こんな可愛い女の子の友達いるとか！

「あ、平野くん！やっほー！来てくれたんだ！」

「うん！勿論だよ！っていうか、」

「魔法少女萌え萌えゆきにゃん」

ではないですか！」

「そだよ。…ゆきにゃん、悪いこと許さないにや！」

「この世の悪はみんなゆきにゃんがやっつけるにや！
ついでにエッチなお兄さんもやっつけるにや！」

「も…もももも萌え——！」

「わはは！……あれ？咲ちゃんちよっと元気ない？」

「え？……あ、わかっちゃおう？」

「おやおや、どうしたのだよ？」「の祭典の日」……」

「うーん……ほら、見て……」

あそこのすごい人気の人。

セクシーレイヤーのレインさん……」

咲ちゃんが言った方向を見ると、

あまりに際どい衣装を身につけた女性が、
大勢の男に囲まれていた。

最近多いんだよね、ああいう連中。

コスプレを楽しみたいのか、肌を露出させたいのか、
よくわからない輩……」

「やっぱりああいうエッチコスの方がいいのかな？」

私、なんか自信なくなってきたきちゃって……」

「なにを言っているのですか！」

咲ちやんはあんなやらしいコスプレしちやダメ！
萌え萌えの清纯派！ちよっとロリも入ってる！
それが君の良さなのですぞ！その処女性こそが！
あんなエロい格好しちやダメ！ダメ絶対！」

「うーん…：そうかなあ…：でも私、

日に日に人気なくなっていくような…」

「そ…：そんなことは…！」

「あの…すみません。

写真撮らせてもらっていいですか？」

「ん？…：な！」

言い合う俺達の前に現れたのは…：男の娘！
めちやめちや可愛らしい女装コスプレ男子だった。
しかしなんですかこの可愛らしさ！この萌え！

「あ…：はい。いらですよ、どうぞ…」

「……ありがとう!」さいました!

俺、咲さんの大ファンなんです。

これからも応援してますね。では失礼します!」

「わ!わ!ありがとう!」さいます!」

男の娘は、写真を撮って礼を言うつと、

風のように去っていった…。

「ほら、咲ちゃん。君のファンはちゃんというる。

君はこのままでいいんだよ」

「うん! そうだね! わく嬉しかったあ〜」

「…それにしても素晴らしい男の娘だったな。

あのエロコスプレの連中より、

よほど萌えをわかってるよ…。

……じゃあ咲ちゃん、俺達そろそろ行くね。

ファンの人が写真撮る邪魔になるといけないし」

「あ…うん。」めんね。

明日はスペースに応援に行くからね! またね!」

コスプレ広場から再び館内に入った俺と千夏。
今度はサークル参加の友人に挨拶だ。

客足のピークも過ぎて、いい感じにすいていた。

「どうも〜加奈子先生〜!」

萌え同人漫画家の、津田加奈子先生。

女オタでありながら、BLなどには一切興味なく、
萌えだけを愛するという素晴らしい御仁だ。

「お〜平野っち!来てくれたんだ〜」

彼女は、描く萌え漫画が素晴らしいのは勿論、

彼氏いない歴〓年(つまりは処女)を公言し、

非モテ主義を貫くという、人呼んで非モテの伝道師。

オタクの鏡のような人なのである。

その人生観に惹かれるオタクは男女ともに多く、

信者的なファンも多い。

かくゆう俺もその一人だったんだけど、

そんな大先生と、ネットを通じて、

こうして友達になっちゃった!俺マジすくくね?

「新刊一冊いいですか？」

「うん！あげるあげる…って、その女の子…」

「あ、どうもはじめまして。」

平野の大学の友人の、岡中千夏といます」

「…どうも。津田です…。」

…平野っち、こちらの方…。」

…まさか彼女じゃないでしょうね？」「

「い！ち、違いますよ！」

ほら、明日初サークル参加するって言ったでしょ？

だからその売り子を頼んだんですよ！

今日は明日の視察みたいな感じで…！」

「ホントでしようね？」

彼女作るなんて、許さないからね！」

「わかってますって……」

「いい？オタクって言うのは、

非モテ・非リア充じゃなきゃいけないの！

世間のリア充を否定的に見てなきゃダメなの！

そういうところから私達の文化、

つまりは『萌え』は生まれたのよ！わかってる？」

「はあ……」

「怪しいわね。大体女の子に売り子させるなんて、

超リア充じゃない！

私なんて今日もこうして一人でやってるのに！

なに？自慢しに来たわけ？

俺は女の子に売り子させられるって？

あーやだ！イタい！超イタい！

リア充になったオタクの典型的イタさが出てる！

どうせあれでしょ！

スケベな格好させて売り子させるんでしょ！

汚らしい！リア充超汚らしい！」

「大体あいつらリア充はなに？
すぐセックスしやがって！」

そんなにセックスしたいの？猿かっつうの！
挙句の果てが避妊もせず生でパコってデキ婚！
あー浅ましい！汚らわしい！

デキ婚なんて最低！子供になんて言うのよ！
つい生でやっっちゃってあなたがデキたから、
パパとママは結婚しました〜ってアホか！

「ちょ…ちよっと先生！」

「セックスがなによ！一生するか！…ぶつぶつ…」

ダメだ。先生の暴走モード…。

こうなっちゃうと手がつけられない。逃げるが得策。

「じゃあ先生。俺達行くんで。

よかったら明日来てくださいね。行こう、千夏」

「うん…」

「あの〜すみません…津田先生ですよね？」

「なに？なに？なに？……ええ？」

「さてと……そろそろ帰るかな……」

買い物を終え、俺は一人呟いた。

千夏は自分の買い物に行った。

二日間開催されるこのオタクコミ。大きく分けると、一日目は女性向けと一般向け。二日目は男性向け。女性向け男性向け両刃の千夏は買い物が忙しく、帰りは別というわけだ。

「……………」

ふと会場内を見渡し、少しソツとした気分になった。ネットで見たある噂を思い出したのだ。

最近、オタクコミで知り合って、

その帰りにラブホテルに行く男女が続出している。

そんな噂……。

さっきの先生じゃないけど、

俺はその噂に、激しい嫌悪感を禁じ得ない。

オタク同士、付き合うとかならまだしも、

このオタクの祭典で出会って、

出会ってすぐ、その帰りにセックスするなんて……。

それは、吐き気を催すような噂話だった……。

これは、非モテがどうか、リア充がどうか、
そういうレベルの問題ではない。

恋人にもなっていないのに、

知り合ってすぐセックスするなんて…。

一般的にオタクというものは、

セックスから遠い位置に存在するはずなんだ…。

なのに、オタクの中に、この会場の中に、

出会ってすぐ、簡単にセックスする人がいるなんて…。

オタクの中の、一番大事な肝の部分が、

他のなにかに侵食されていくような感覚…。

俺の大好きなオタクという概念が、

黒く塗り潰されていくような感覚…。

今、俺の視界の中に入ってる人の中にも、

そういう人…いるのか？

そう考えて見てみると、

仲良く笑い合ってる男女、多くないか…？

「…………ゴクツ…………ああ！ダメダメ！考えすぎだ！」

変な妄想はやめよう。もしそんな人がいるとしても、
ごくごく一部だ。それも、オタクじゃない人なんだ。
オタクは大丈夫。オタクはなにも変わらないさ…。
そんなことより、明日は初サークル参加なんだぞ。
頑張らないと…………。

清纯派萌え萌えコスプレイヤー
咲

私、オタコミの打ち上げで
仲良くなつた男と、
ソツコーでラブホ行って、
会ったその日の内に、
コスプレパコパコしちゃいました♡
いっえ〜〜〜いっえ〜
いっえ〜〜〜いっえ〜
いっえ〜〜〜いっえ〜



オタクコミ後、アキバ。オタク御用達カフェ&バー……。

「はあ……」

（あ……レイヤーの親睦会に参加したものの……。
さつきから完全にぼっち状態で飲んでる私……。
実はレイヤーの友達っていないんだよね……。
この機会に作ろうと思ってたんだけど……。
どう話しかけていいものか……。
結構人見知りだからなあ……うーん……）

「今回のコスも最高だったよ！」

「うん！今回も楽しませてもらいました！」

「え……やだ……♡」

（あ……レインさん。やっぱ人気だなあ……）

あんなに男の人に囲まれて……はあ……羨ましい……）

「どうも……」「座っていいかな？」

「……え？」

「え？あ…えっと…」

「俺、俺。わかんない？ほら、昼間の…」

「え？……わ！あ、あの時の男の娘さん！」

「そうっす！どうも！」

「わ！どうぞどうぞ！」

「ここ、座ってください！」

「サンキュ！。…じゃ、失礼します」

「わーびつくりしたな〜。

昼間と全然違うじゃないですか！」

「そりやあまあ、あれはコスだから。

これが普段の俺。本物の俺だよ」

「いや、それにしたって全然違う…。

すごく男らしいし、男の娘とは思えませんよ…。」

「それはほら、男の娘は…まあなんていうの？
ただのあれだから………性癖？」

「あはは！やだ〜性癖って！」

「はは！いや俺さ、マジ咲ちゃんの大ファンなの！
お近づきになれて嬉しいよ！」

「ホント？ありがとう〜♪」

「…でもなんか、ヨスの時と性格も変わってない？
昼間は礼儀正しかったのに！
なんか慣れ慣れしいぞ(笑)」

「あ、やべ！私は、咲さんの大ファンであります！
お近づきになれて光栄であります！」

「ははは！もう〜普通でいいよ？」

「あ、そう？よかった♪助かった〜♪」

「あはは♪」

「この人面白い♪…友達になれるかな？あは♪」

四十分後…。

「きゃはは♪もうやだ！ハルくんのバカ♥」

「え？ははは！」

（なんか楽しい♪酔っちゃってるのかな？ふふ♪）

「咲ちゃんさ…：アドレスいい？」

「せっかくだし友達になるうよ」

「わ！うん！ぜひぜひ！」「ちら」「そお願ひします☆
ちよっと待ってね、よいしよつと…」

（やったー！初レイヤー友達ゲット♥

でもまさか最初の友達が男の子だなんて…。

…しかもかなりのイケメンだし♥あは！やばあ♥）

「ありがとう」

「うん！あ、そうだハルくん！

友達になったから、せっかくだし聞くけど…」

「やっぱり男の人って…エロレイヤーが好きなの？」

「い！なに、いきなり？」

「いや、ほら見てよ。あの人。」

…エロレイヤーのレイン。

裸同然コスプレ露出狂のクソビッチ。

男に囲まれてちやほやされて…」

「…」「…」「…」聞「えたらどうすんの？」

っていうか咲ちゃん酔ってるだろ？」

「あ！あのビッチの肩持つ気？」

やっぱり君もエロレイヤーが好きなんだ！

このスケベ！スケベ男の娘！」

「ち、違うって！」

俺は断然咲ちゃんの方が好きだよ！

だからこうして君のところに来てるんだろ？」

「え……」

「前からファンだったって言っただろ？
ネットで君のこと知ってさ……。」

うわ！この子可愛い！俺の理想だ！ってなってさ。
正直ほら……一目惚れっていうの？

なんつーか……出来れば付き合いたいくらい？
あははは！やべ！言っちゃった！」

「ちよっ……やだ、ハルくん……酔ってるでしょ？」

「それはお互い様だろ？」

ははは！もう酔った勢いで言っちゃうぜ！

咲ちゃんマジタイプ！超可愛い！

あー！咲ちゃんと付き合いたくないな〜！

この気持ち咲ちゃんに伝わればな〜！」

「や、やだ……」

（そんなこと言われたら、ドキツとしちゃうじゃない。

……あ……やば）

(やばい…やばい…あーやばくさい…
……超エッチしたくなってきちやった)

「はは、冗談冗談！いきなり告白なんてしないよ！」

「ああ…はは…」

(なんだろ、この性欲…？やっぱ酔ってるのかな…？
それとも最近ずっと彼氏いないから、
全然エッチしてなくて、たまってるってやつ…？
はあ…やりたいなあ…。なんか超乱れたい…)

「まあとにかく、咲ちゃんはずごく魅力的ってこと。
自信持っていいから♪」

「うん…ありがと…」

(ハルくんがすごくイケメンだからかな？

私…正直…この人と… …… やりたい♡

ああ！ダメダメ！そんな目で見ちゃ！友達だよ？
私のファンって言ってくれてるんだよ！)

「まあそんなわけで、告白は冗談として…」

「咲ちゃんさ……………ホテル行かない？」

「い！」

「君のこと好きっていうのはホントなんだよ。でも、いきなり付き合うとかは重いでしょ？」

彼氏もいるかもしれないし…。

だからさ…一夜の過ちで、忘れてくれていいし、酔った勢いで…ノリで…。

…………私とラブホテルに行きませんか？」



「…マジ」

「うん、マジ。超マジ」

「……………」

（……………こういうことって、本当にあるんだ…。

会ったばっかなのに…彼氏でもないのに…。

エッチ……………しちゃうってことだよな……………。

…………妄想だけで、ありえないって思ったのに…………）

「ダメかな？……エッチ、しちやわない？」

「でも……そんな……」

（もう……簡単に言わないでよ……。

そっちは慣れてるかもしれないけど……。

私は彼氏以外としたことなんてないんだから……。

はあ……出会ってすぐエッチか……。

彼氏じゃないのに……好きでもないのに……エッチ。

ああ……すごくエロい感じ……。いけない感じ……。

はあ……どうしよう……。……すごく惹かれちゃう。

ああ、ダメだ……！やっぱ酔ってるわ……)

「いいじゃん。ね、しようよ？」

……君も本当はしたいって、顔に書いてるよ？」

「そんな……ゴクッ……」

（まさか、見抜かれてる？

いやいや、鎌かけてるだけよ。

……ホントは超したいけど。

あー！しちやいたい……ってダメダメ！

何考えてんの……！……はあ……ホントどうしよう……)

「行こうよ…もう勢いでさ。」

出会ったその日の内に、
しかもオタヨミで知り合ったその日の内に、
…エッチしちやおうよ？
背徳感に、きつとすごく興奮出来るよ？」

（出会ってすぐエッチ…。

会ったその日の内にエッチ…。

彼氏じゃないのにエッチ…。

すごくふしだらな感じ…。ダメ…超魅力的…。

ダメ…ダメ…もう…無理…)

「ほらほら、素直になっちゃえ！」

清纯派コスプレイヤーの咲ちゃん？あは♪」

（…今まで…真面目に生きてきたもん…。
全然遊ばないで…真面目に生きてきたもん…。
だから…たまには…一回くらい…一回だけ…。
…そんな…悪いことじゃないもん…)

「…どう？ラブホ…行っちゃいませんか？」

「……………ゴクッ」

「い……行っちやいますかあ☆」

「あら！すげえノリノリ！はは！」

「…出会ってすぐ、エッチしちやいますかあ〜？」

「で…出会ってすぐ、エッチしちやいますかあ☆」

（あは☆やだ、すごく楽しい♪

…もうこうなったら楽しんじやえ♪）

「あはは！パコパコしちやいますかあ〜？」

「うふふ♪…パコパコしちやいますあ〜す♡」

「咲ちゃん最高！じゃあ行き、ラブホ！」

「うん！ラブホへレッツゴー！」

「はは♪皆さーんすみません！俺達抜けまーす！」

オタイベントの直後なのにリア充っちやいます！」

「あはは☆リア充っちやいますあ〜っす☆」